

衆議院補欠選挙と自民党の凋落

2024.05.10 守山裕次郎

1. 衆議院補欠選挙結果（たかが補選、されど補選）

去る4月28日（日）衆議院補選が全国3選挙区で実施された。一つは長崎、一つは島根、もう一つが東京で、これら3選挙区は下記の事情で補選に至ったが、自民党は長崎と東京では候補者を擁立できず、保守王国の島根でも立民党に敗れて実質3戦全敗となった。

1) 長崎3区：

「自民党裏金問題」で、その恩恵を受けた議員の一人に長崎3区の谷川弥一氏がいた。彼は会見の席で記者の質問にぶち切れし、実にお粗末で恥ずかしい姿が全国に報道された。谷川氏は82歳の高齢、加えて次の長崎選挙区は「定数1名減」となるため、ここが潮時と考えたのか、任期満了を待たずに早期の辞職を決断した。今回自民党は候補者を立てず、立民と維新だけの戦いとなり結果は立民が勝利した。

2) 島根全県区：

清和会（旧安倍派）の元会長、前衆議院議長の細田氏が昨年亡くなり、欠員となった。この選挙区は竹下元総理、青木元参院幹事長の地元で「保守王国」で有名、特に今回は細田氏の「吊い合戦」なので、自民が圧勝しても不思議でなかったが、立民元職の亀井氏に大差で敗れた。自民はこの結果を「極めて深刻な事態」と真摯に受け止めるべきである。

3) 東京15区（江東区）：

ここは自民党議員が二人続けて「お縄頂戴」となった「信じがたい選挙区」である。直近では柿沢未途氏（前法務副大臣）が江東区長選に絡む贈賄罪で逮捕され、上告を断念したため有罪が確定した。（そのための補選）

柿沢氏の前の議員が秋元司氏だった。秋元氏は自身が絡む総合型リゾート事業を巡り、汚職事件（収賄罪）が発覚し議員を辞職した。その補選で当選したのが柿沢氏だったが、今度はその柿沢氏が贈賄罪で逮捕され、「自民党議員の連続不祥事」となってしまった。

驚いたのは1審で有罪、2審高裁も有罪の秋元司氏が、今回再び立候補して落選したが、何の目的だったのかが全く理解できない。

今回東京15区は超激戦となり、秋元氏に加え参議院無所属（元立憲民主）で格闘家の須藤元気氏、女性候補者として、日本維新の会の金沢結衣氏、参政党の吉川里奈氏、立憲民主党（共産党推薦）の酒井菜摘氏、日本保守党の飯山陽氏ら30代～40代の「若き美女たちの戦い」が繰り広げられた。（ルッキズムと批判されるかも・・・）この他に諸派の男性2名が出馬したが、このうちの一人の根本良輔氏は、相手候補者への選挙妨害だけが目的のとんでもない人物で、速やかに法改正しない限り公正な選挙戦など全くできない。

今回自民党の対応に特に注目が集まったが、さすがに二人続けて逮捕者を出したため、独自候補の擁立を見送った。一方で「都民ファーストの会」を取り仕切る小池都知事が、作家の乙武洋匡氏を擁立し、自民、公明、国民民主からの推薦にも期待したが、各党とも

様々な事情を抱えており、結局国民民主からの推薦だけに終わった。

かつて「五体不満足」の著書で有名になった乙武氏だが、結婚後5人の女性との不倫が発覚、週刊誌に「五股不倫」とも報じられ、2016年参院選に自民党からの出馬寸前、取り止めになった経緯がある。更に2022年参院選に無所属で東京選挙区から立候補したが、改選数6名に対し9番目の得票で落選した。

今回は補選直前に更に不利な状況が発生した。それは小池都知事の学歴詐称疑惑の再燃である。以前から「カイロ大学首席卒業」との経歴に、多くの疑問が投げかけられていた。かつて小池都知事の最側近ブレンだった小島敏郎氏が、先月文藝春秋に投稿した内容に驚いた。それによると4年前の都知事選前、学歴詐称疑惑で困っていた小池氏が小島氏に相談した。そこで彼を含む数人がアイデアを出し、何とか乗り切ったそうである。

だが今後は小池氏の学歴詐称疑惑を黙認せずに、近々行なわれる都知事選で再び彼女が「カイロ大学卒業」の経歴で立候補した場合には、刑事告訴する可能性を示唆しており、小池都知事には「行くも地獄、退くも地獄」が待ちうけているようである。そして様々な事情により自民、公明の推薦が得られなかった乙武氏は、想定外の5位に終わった。

一方、立憲民主の酒井氏は、共産党との共闘を嫌った連合からの推薦は見送られたが、共産を含む固い組織票に加え、過去最低の投票率(40.7%)も大きく味方して当選した。

※得票数 1. 酒井菜摘(立民、共産推薦): 49,476 2. 須藤元気(無所属): 29,669

3. 金沢結衣(日本維新): 28,461 4. 飯山あかり(日本保守党): 24,264

5. 乙武洋匡(無所属): 19,655 6位以下省略

今回「東京15区」補選で個人的に大いに期待したのは、日本保守党から初の国政選挙に立候補した飯山あかり氏だった。

安倍さん亡き後の自民党の体たらくに呆れ果て、作家の百田尚樹氏とジャーナリストの有本香氏が昨年「日本保守党」を立ち上げた。その趣旨に賛同し、早速私も黨員となった。その基本理念は「日本を豊かに・強く」、だが既存政党は真逆の政策しか行っていない。

そして今回、初の国政選挙の候補者にイスラム思想研究者の飯山あかり氏を擁立した。彼女は専門の中東問題に関し、自身のユーチューブ番組でも語っているが、多くの知識人、マスメディア、外務省を含め、現状認識が全く違っていると日頃から強く指摘している。専門分野で異論を唱える彼女は四面楚歌で孤軍奮闘、周囲からのバッシングは半端でない。だがそれにも負けずに強い信念の下に戦う女性として、多くの人から信頼を得ている。

彼女は選挙出馬など全くの想定外だったそうだが、日本保守党の有本事務総長の説得でこれを決断した。彼女は東大博士課程の経歴で頭脳明晰、候補者9名の中で説得力は抜群、選挙演説の会場には常に多くの聴衆が集まった。

だが残念ながら江東区では無名の新人、組織票もなくハンディは極めて大きかったが、過去最低の投票率の中、2万4千票余りを獲得したことは実に素晴らしい。

日本保守党は初の国政選挙を経験し、多くの収穫を得た。この経験を7月の都知事選や来る総選挙に生かし、更なる飛躍に向けた大きな第一歩にしてほしい。

2. 自民党の果てしない凋落

今回の衆院3選挙区補選は、島根以外は自民党の不祥事が原因だが、昨年発覚した裏金問題を含め、最近の自民党の体たらくは酷すぎる。「みんなで渡れば怖くない」の論法で清和研（旧安倍派）、二階派、岸田派によるパーティー券収入キックバック金の不記載が永年行なわれていた。これ自体大問題だが、それに加えて悪質なのが以下である。

- 1) パーティー券のキックバックシステムに関し、関係議員すべてが「会計責任者に任せ、自分は全く知らなかった」と答えた。検察による厳しい捜査がなされたが、結果は証拠不十分「大山鳴動ネズミー一匹」となった。
- 2) 安倍さんが総理を辞めて清和研会長に復帰した。この時裏金のキックバックの実態を知り速やかに止めさせた。ところが彼が奈良で殺害された数ヶ月後、多くの議員からの要望もあり、キックバックが再開されたそうである。
- 3) 問題は安倍さん亡き後、この悪しき習慣を復活させた責任者が誰なのか？である。安倍派幹部全員が関係しているはずだが、彼ら全員が「知らぬ存ぜぬ」で押し通した。※国会「政倫審」でも「知らぬ存ぜぬ」で通したが、法的にはごまかせても国民の目はごまかせない。国会の場で堂々と嘘を言う議員を誰が信用するのか！
以上は清和研（旧安倍派）の問題だが、同じような不記載問題は二階派、そして岸田派でも行なわれていた。
- 4) 裏金問題の責任を問われ、清和会幹部5人衆がペナルティーを受けた。更に二階氏は次の総選挙への不出馬を表明した。一方で、岸田派会長だった岸田総理にペナルティーがないのは全く理解できない。逆に彼はこの機会を利用して、最大派閥の清和会を潰すことに成功した。彼は自分だけの生き残りを図る極めて無責任な人物である。

3. 我が国政治の再びの混迷を危惧

2年近く前に安倍さんが暗殺され、その後自民党は急激に瓦解した。改めて安倍さんの偉大さを再認識させられると共に、再び生じるだろう今後の政界大混乱が心配である。

「悪夢の民主党時代」を知る身として、それだけは勘弁してほしいと願うばかりである。

政治家をここまで墮落させた責任は我々有権者にある。一方で、マスメディアの責任も極めて大きい。中でも朝日新聞や毎日新聞、その系列のテレビやNHKを含め、角度をつけた偏向報道で国民をミスリードした結果、今日に至ったのは間違いない。

安倍政権をあれだけ叩いたこれらメディアだが、無能で無責任な岸田総理を批判する論調は極めて少ない。かつて小沢一郎氏が「神輿は軽くてパーが良い」と言っていたが、岸田総理はその典型例である。彼の周囲にとっては都合が良いだろうが、我々国民には迷惑千万、早急に交代してほしい。だが代替人材に乏しいのが最大の不幸と言える。

新たな「日本保守党」に期待するが、既存メディアはその存在をほとんど報道もしない。補選で今回全くのゼロからスタートし、その存在をPRできたことは大きな収穫である。これを起点にして3年～5年後、我が国の政治改革に大きく寄与することを強く願う。

以上